

メタポリティックの概念

加藤恵介（神戸山手大学）

ハイデガー全集における『黒ノート』の出版とともに、ハイデガーの1930年代後半の「存在史」の構想のうちに含まれる反ユダヤ主義的な要素が問題となった。このとき哲学的な問題になるのは、ハイデガー個人が（ナチ党员であった上に）反ユダヤ主義者であったか否か、ではなく、ハイデガーの哲学がその本質的な部分において、はたして、あるいは、どの程度反ユダヤ主義と結びつくものであったか、である。（この解明のためには、ナチズムと反ユダヤ主義の「本質」も問われることになる。）そこで、フィガールやトラヴニーも言うように「区別すること」「汚染に境界線を引くこと」が必要になる。

しかし問題は、ハイデガーの哲学あるいは思索が、このような区別に抗うような性質を示していることであり、それは、ハイデガーの思索が歴史的、政治的な「現実」と取り結ぶ特異な関係によるものである。このことは単純に非難あるいは弁護すべき「欠陥」ではなく、むしろ、哲学と現実の関係について再考するための特権的な一事例を提供するものと思われる。

『黒ノート』において顕著なことは、彼の存在史の構想が、現実の世界史的な事象と直接的に結びつけられ、当時の歴史的、政治的現実そのまま存在史的な意味が与えられていることである。古代ギリシアの「第一の始原」を受け継ぐ「別の始原」の民族として「ドイツ民族」に特権性が与えられるだけではなく、これと敵対するものとして「歴史なきもの」「地盤なきもの」(GA95,96)である「ユダヤ(Judentum)」が名指される。国家を持たないユダヤ人の現実が直接的に「無世界性」と結びつけられ、存在論的、存在史的な規定と存在者的（オンティッシュ）な現実の事象が短絡させられている。ただし、この時期ハイデガーはすでにナチズムと批判的な距離を取っており、「第一の始原」の終焉は、いずれも近代形而上学の帰結としての作為性（Machenschaft）の諸形態であるナチズムと、アングロ・アメリカニズム、ボルシェヴィズム、そしてその根本にある「世界ユダヤ組織(Weltjudentum)」の間の終末論的抗争を伴うものとされる。

ハイデガーの思索は、なぜこのような形で歴史的、政治的な現実を取り込むことになったのだろうか。このことを解明するために、『黒ノート』に現れる「メ

タポリティック(Metapolitik)」という概念を取り上げる。ハイデガーによれば「我々は哲学を終焉に導き、それによって全く他なるもの、メタポリティックを準備しなければならない」(GA94,115)。「現存在の形而上学は、その最も内的な接合構造に従って、歴史的民族「の」メタポリティックへと、深化、拡大しなければならない」(124)。

ハイデガーにおけるこの語の意味について、トラヴニーは、メタポリティックとは「「第一の」始原と「別の」始原の関係についてのハイデガーの存在史的考察」に他ならないとしている(532-3)。しかし、この語が用いられるのは彼の総長在任中の時期であり、この語が「形而上学」と等置されている以上(116)、これをただちに存在史的考察と同一視することはできない。むしろこの概念はハイデガーの『存在と時間』公刊後の講義に現れるメタ存在論(Metontologie)の発展した形態と見なすことができる。

メタ存在論とは、現存在の存在理解を制約する事実性と有限性を、「形而上学」の内部に回収しようとする試みであった。『存在と時間』において、初期フライブルク講義に始まる事実性の解釈学を引き継ぐ実存論的分析論が、存在一般の問いのための基礎存在論として位置づけられた。すると、「問う者」である現存在の実存の事実性が、基礎存在論を制約することになる。その後のハイデガーはこの「哲学の有限性」に踏みとどまるのではなく、そこからの「存在論の転換」を要請する。「存在が与えられるのは、現存在が存在を理解するときのみである」が、「存在が理解のうちにあることの可能性は、その前提として現存在の事実実存をもつ。そして現存在の事実実存はさらに、その前提として自然の事実的な直前存在をもつ」(GA26,198-9)。それゆえ、「現存在の分析論」「存在のテンポラリテートの分析論」に続いて、そこからの「転換」による、「存在者をその全体においてテーマにする」「形而上学的存在者論」が要請される。これが「メタ存在論」であり、「基礎存在論とメタ存在論は、それらの統一において形而上学の概念を形成している」(201)。つまり、形而上学は「問う者」の実存の事実性、有限性による制約を、その前提となる「存在者の全体」を取り込むことによって克服すべきものとされる。

メタポリティックは、このメタ存在論を、「歴史的現存在」である「民族」のものとして「深化、拡大」するものである。これによって、存在の問いを担う者としてのドイツ民族の歴史的、政治的な現実が、「形而上学」の中に取り込まれることになる。